

日本の名作名文ハイライト

地獄変

芥川龍之介

朗読 坪井祐実

出所 坪井祐実の〜声の空間〜

<http://www.voiceblog.jp/hana-sumire24/>

teabreak 編

地獄変

芥川龍之介

一

堀川の大殿様のような方は、これまでは固より、後の世には恐らく二人とはいらっしやいますまい。噂に聞きますと、あの方の御誕生になる前には、大威徳明王の御姿が御母君の夢枕にお立ちになったとか申す事でございますが、とにかく御生れつきから、並々の人間とは御違いになっていたようでございます。でございますから、あの方の為さいました事には、一つとして私どもの意表に出ていないものはございません。早い話が堀川のお邸の御規模を拜見致しましても、壮大と申しましょうか、豪放と申しましょうか、到底私どもの凡慮には及ばない、思い切った所があるようでございます。中にはまた、そこを色々とあげつらって大殿様の御性行を始皇帝や煬帝に比べるものもございしますが、それは諺にいう群盲の象を撫でるようなものでもございまいしょうか。あの方の御思召は、決してそのようなに御自分ばかり、栄耀栄華をなさらうと申すのではありません。それよりはもっと下々の事まで御考えになる、いわば天下と共に楽しむとでも申しそうな、大腹中の御器量がございました。

それでございますから、二条大宮の百鬼夜行に御遇いになっても、格別御障りがなかったのでございます。また陸奥の塩竈の景色を

写したので名高いあの東三条の河原院に、夜な／＼現われるという噂のあった融の左大臣の霊でさへ、大殿様のお叱りを受けては、姿を消したのに相違ございますまい。かような御威光でございますから、その頃洛中の老若男女が、大殿様と申しますと、まるで権者の再来のようになり尊み合いましたも、決して無理ではございません。何時ぞや、内の梅花の宴からの御帰りに御車の牛が放れて、折から通りかかった老人に怪我をさせました時でさへ、その老人は手を合せて、大殿様の牛にかけられた事を難有がったと申す事でございます。

さような次第でございますから、大殿様御一代の間には、後々までも語り草になりますような事が、随分沢山にございました。大供の引出物に白馬ばかりを三十頭、賜ったこともございますし、長良の橋の橋柱に御寵愛の童を立てた事もございますし、それからまた華陀の術を伝えた震旦の僧に、御腿の瘡を御切らせになった事もございますし、

—— 一々数へ立てておりましたは、とても際限がございません。が、その数多い御逸事の中でも、今では御家の重宝になっております地獄変の屏風の由来程、恐ろしい話はございますまい。日頃は物に御騒ぎにならない大殿様でさへ、あの時ばかりは、流石に御驚きになったようでございますました。まして御側に仕えていた私どもが、魂も消えるばかりに思ったのは、申し上げるまでもございません。中でもこの私なぞは、大殿様にも二十年来御奉公申しておりましたが、それでさへ

あのような凄じい見物に出遇った事は、ついぞまたとなかった位でございませう。

しかし、その御話を致しますには、あらかじめまず、あの地獄変の屏風を描きました、良秀と申す画師の事を申し上げて置く必要がございませう。

二

良秀と申しましたら、あるいはただいまでもなお、あの男の事を覚えていらっしやる方がございませう。その頃絵筆をとりましては、良秀の右に出るものは一人もあるまいと申された位、高名な絵師でございませう。あの時の事がございました時には、彼これもう五十の阪に、手がとどいておりましたらうか。見た所はただ、背の低い、骨と皮ばかりに痩せた、意地の悪そうな老人でございました。それが大殿様の御邸へ参ります時には、よく丁字染の狩衣に揉烏帽子をかけておりましたが、人がらは至って卑しい方で、なぜか年よりらしくもなく、唇の目立って赤いのが、その上にまた気味の悪い、いかにも獣めいた心もちを起させたものでございます。中にはあれは画筆を舐めるので紅がつくのだなどと申した人もおりましたが、どういふものでございませうか。最もそれより口の悪い誰彼は、良秀の立居振舞が猿のようだとか申しまして、猿秀という譚名までつけた事がございました。

いや猿秀と申せば、かような御話もございます。その頃大殿様の御

邸には、十五になる良秀の一人娘が、小女房に上つておりましたが、これはまた生みの親には似もつかない、愛嬌のある娘でございました。その上早く女親に別れましたせいか、思いやりの深い、年よりはませた、利巧な生れつきで、年の若いのにも似ず、何かとよく気がつくものでございますから、御台様を始め外の女房たちにも、可愛がられていたようでございます。

すると何かの折に、丹波の国から人馴れた猿を一匹、献上したものがございまして、それにちようど悪戯盛りの若殿様が、良秀という名を御つけになりました。ただでさえその猿の容子が可笑しい所へ、かような名がついたのでございますから、御邸中誰一人笑わないものもございません。それも笑うばかりならよろしうございますが、面白半分に分のものが、やれ御庭の松に上ったの、やれ曹司の畳をよごしたのと、その度毎に、良秀々々と呼び立てては、とにかくいじめたがるのでございます。

所がある日の事、前に申しました良秀の娘が、御文を結んだ寒紅梅の枝を持って、長い御廊下を通りかかりますと、遠くの遣戸の向うから、例の小猿の良秀が、大方足でも挫いたのでございましょう、何時ものように柱へ駆け上る元気もなく、跛を引き、一散に、逃げて参るのでございます。しかもその後からは楚をふり上げた若殿様が

「柑子盗人め、待て。待て。」と仰有りながら、追いかけていらっ

しやるのではございませんか。良秀の娘はこれを見ますと、ちよいとの間ためらったようでございますが、ちようどその時逃げて来た猿が、袴の裾にすがりながら、哀れな声を出して啼き立てました——と、急に可哀そうだと思う心が、抑え切れなくなったのでございましょう。片手に梅の枝をかざしたまま、片手に紫匂の桂の袖を軽そうにはらりと開きますと、やさしくその猿を抱き上げて、若殿様の御前に小腰をかがめながら「恐れながら畜生でございます。どうか御勘弁遊ばしませし。」と、涼しい声で申し上げました。

が、若殿様の方は、氣負って駆けてお出でになった所でございますから、むずかしい御顔をなすって、二三度御み足を御踏鳴しになりながら、

何でかばう。その猿は柑子盗人だぞ。」

畜生でございますから、……」

娘はもう一度こう繰返しましたがやがて寂しそうにはほほ笑みますと、それに良秀と申しますと、父が御折檻を受けますようで、どうもただ見てはいられませぬ。」と、思い切ったように申すのでございします。

これには流石の若殿様も、我を御折りになったのでございましょう。

そうか。父親の命乞なら、枉げて赦してとらすとしよう。」

不承無承にこう仰有ると、楚をそこへ御捨てになって、元いらした遣戸の方へ、そのまま御帰りになってしまいました。